



2013年9月11日放送

頻用処方解説 桃核承気湯

日本医科大学付属病院 東洋医学科 平馬 直樹

1. 主な効能

本日お話しする桃核承気湯の主な効能は、体内にこもった熱邪と瘀血を通便によって体外に排除することです。活血化瘀と清熱瀉下の作用に優れます。月経不順、月経困難症、月経前症候群などの婦人科疾患、月経前後や産後の精神不安、また男女とも頭痛、肩こり、めまい、腰痛、便秘、歯肉や鼻の出血などに応用されます。

2. 出典・処方名の由来

桃核承気湯の出典は『傷寒論』で、太陽病中篇に条文が見られます。「太陽病がまだ治らず、熱が膀胱にこもると精神不穏になり下血する。自然に下血する者は癒えるが、表証が残っている者はまだ攻めてはいけない。まず表を治療すべきだ。表証が治まり、小腹急結している者は攻下してもよい。桃核承気湯が良いだろう」（意識）というものです。太陽経の邪が裏に入り、熱と血が結ばれて生じる太陽蓄血証といわれる病態では、小腹急結と精神不穏を生じています。治療を加えなくても下血する場合は、自然治癒機転が働き熱と瘀血が排出されます。もし表証が残っている場合は、下してしまうと邪が裏に入り込んでしまうので、すぐに下すのは避け、まず表を治療します。表の邪がのぞかれた後、小腹急結が残っている場合には攻下すべきで、桃核承気湯の適応となります。

本方は桃核、すなわちモモの種子桃仁が主薬で、大黃・芒硝・甘草の調胃承気湯が配合されていることから、桃核承気湯と名付けられたのでしょう。

3. 生薬構成

次に配合生薬の構成を述べます。桃核承気湯は桃仁・大黃・芒硝・桂枝（皮）・甘草の5味から成ります。桃仁には強力な活血化瘀作用と潤腸通便作用があります。大黃には通便によって裏の熱を排除する働きがあり、この2つの薬が処方骨格で瘀血と裏熱を駆逐します。桂枝（皮）は血脈を疎通して桃仁の活血化瘀を助け、芒硝は秘結した便を軟らかくして大黃を補助します。甘草は処方全体の峻烈性を緩和して、胃腸を整え胃腸の気を保護しています。

4. 古医書における記載

古医書における記載を見ますと、内島保定の『古方節義』（1771）には、「この方は太陽の症が解せずに膀胱の腑に伝わったものに用い、桂枝によって表を散らし、大黃・芒硝によって裏を下す表裏両解の剤である。調胃承気湯に桃仁を加えて瘀血を追い、桂枝で外邪を解くのである。その証は小腹が堅く、小便は頻数でよく通じ、譫語、狂言（すなわちうわごとやでたらめなことをしゃべる）ものである。吐血、鼻血、婦人の瘀血で小腹が堅く痛みがひどいもの、産後に瘀血が下がらずに腹痛するもの、打撲による腹痛で瘀血に属するものなどことごとくこの湯を用いるべきである」（意識）と述べ、桃核承気湯の証と処方構成、応用を深く考察しています。

浅田宗伯（1815-1894）の『勿誤薬室方函口訣』では、「桃核承気湯は傷寒蓄血、小腹急結を治すのはもちろんのこと、諸々の血証（出血性疾患）に運用される。たとえば吐血、鼻血の止まぬもの、口内炎、歯肉炎で出血のやまぬものは、この方でなくては治すことができず、癰疽（できもの）および痘瘡で患部が紫黒色（紫を帯びた黒）で内陷しかけているものは、この方で気持ちよく下せば思いのほか効果があるものである。また、婦人の陰門腫痛（外陰部の腫れ痛み）あるいは血淋（炎症による血尿）に効果があり、産後の悪露が少なく腹痛するもの、胞衣（胎盤）が日久しく下らないものは、この方を煎じて、清酒を入れ、飲みやすくして徐々に与えるとよい。また打撲、月経閉止など瘀血による腰痛にも用いる」（意識）と広い応用範囲を示しています。

5. 現代における使い方

桃核承気湯は熱と瘀血が体内に停留した状態に広く応用されます。月経異常、産後の月経不順、月経痛、腰痛、のぼせ、便秘、頭痛、めまい、不眠、不安などの症状を和らげ、高血圧に伴う頭痛、めまい、肩こり、のぼせ、便秘などの症状にも効果があります。また、乳腺症や炎症性の皮膚疾患に用いられ、先に紹介した古典の記載にもあるように血熱による出血にも用います。

6. 処方適用のポイント

桃核承気湯は、体内にこもった熱邪と瘀血を通便によって体外に排除する処方です。邪

の部位は下腹部、骨盤腔内など下半身であれば、通便によって排除するのは近くの排出ルートから駆除することになり手っ取り早い方法です。このため婦人科疾患、胃腸疾患、泌尿器疾患の熱邪と瘀血が結合した状態の治療に用います。

一方、熱邪の性質は身体の上部に燃え昇ることにあります。上部の熱は下がりにくくなっていますが、清熱の方法に加えて通便や利尿の方法を採ると熱邪の下降に効果がある場合があります。このため熱邪と瘀血による興奮状態や頭痛、目の痛みや充血、歯肉出血、鼻出血などで便秘を伴うものには、桃核承気湯で活血化瘀しながら瀉下すると、身体上部の熱が速やかに下降して排除されることがあります。

いずれにしても適応症は熱証で実証。便秘があってもなくても使えますが、瀉下剤ですので長く使うと体力を消耗します。基本的には救急に用いる処方で、長期投与には適しません。

7. 類方鑑別

類似処方との鑑別ですが、瘀血を取り除く桂枝茯苓丸、大黄牡丹皮湯、通導散などと鑑別します。桂枝茯苓丸は原典では婦人の下腹部宿塊（長期にわたって形成された腫瘍）に用いるものですが、月経不調・不正出血・産後の不調、腹痛、腹部の腫瘍など、広く腹部から下腹部の瘀血に用いられ、瘀血証に対する標準的な治療薬です。桃核承気湯のほうが、熱状が強く、のぼせ、出血、精神不穏などがみられるのが特徴です。

次に大黄牡丹皮湯です。構成生薬は牡丹皮・桃仁・冬瓜子・芒硝・大黄からなり、桃仁・芒硝・大黄の3味が桃核承気湯と重なります。身体下部の熱と瘀血を活血と通便によって取り除くのは共通しています。大黄牡丹皮湯は原典の『金匱要略』では虫垂炎などの化膿性腸疾患である腸癰の治療薬です。月経痛など婦人科領域にも応用されますが、主に腸の炎症性疾患や痔核・痔瘻などに用いるものです。

さらに通導散ですが、瘀血を改善する当帰、紅花、蘇木に、通便により邪を排除する大黄、枳実、厚朴、芒硝を配合し、さらに利水の木通と胃腸を整える陳皮、甘草を配合しています。桃核承気湯と類似した配合です。原典の『万病回春』では、打撲による外傷で、体内の出血と痛みを苦しむものに用います。紅花と蘇木の配合は打撲による体内の瘀血を排除するためによく用いられます。このように打撲による内出血専用としてつくられた処方でしたが、後世方の一貫堂の森道伯（1867-1931）は瘀血証体質の改善に広く応用して用いました。医療用漢方製剤の通導散は各薬物の分量が少なめですので、ゆっくり瘀血を解除する力があり、長期にも投与されます。桃核承気湯のほうが、作用が強力で熱をさます力も優れています。

8. 自験例の紹介

最後に症例を紹介します。47歳の女性、身体上部の火照りと月経前の焦燥感を主訴に来院しましたが、ほかにもいろいろ症状があります。163cm、78kgと肥満体質です。20歳代

で精神科への入院歴があり、イライラと不眠のため種々の向精神薬を服用してきました。最近薬の量を大幅に減らして病状も落ちついているということですが、どこかそわそわして落ち着きがなく、イライラしやすいとのこと。便秘のためコーラック錠を服用、高脂血症のため服薬しています。卵巣嚢腫と子宮筋腫も指摘され、月経は遅れがちで月経前に便秘とイライラと不眠が強くなるということです。口が渴き冷たい水をたくさん飲みます。汗かきです。脈は滑数、舌の赤みが強く、苔は薄く表面が乾燥しています。

桃核承気湯を1日3包投与、1週間後のぼせはだいぶ改善、便通は下痢気味でほぼ毎日排便。桃核承気湯を1日2包に減らし継続。その2週間後にはのぼせもイライラも大きく改善しているとのこと。月経が到来したが、月経前のイライラ、不眠もそれほど苦痛ではなかった。診察室でのそわそわも見られなくなっている。桃核承気湯はその役割を果たしましたが、まだ瘀血が残っていると判断して、より穏やかに瘀血を解除する通導散に転方、月経前にイライラが強くなれば桃核承気湯を頓服で服用と指示、その後、比較的体調よく過ごしています。

以上、桃核承気湯についてお話しました。参考にいただければ幸いです。